

◎今、安威川河川敷にあります。ええ〜と、と話し出す前に目の前によろよろが居るではないですか。今年初めての蛇、1メートル足らずのシマヘビ君である。「おお お初だね 元気そうに きみい えらく光っててりがあるね」止まってじっと見た、見つめられた彼はUターンして草むらに進むがまだなんだか動作が緩慢、起き出したばかりかもしれないね。

物知りネット氏：10度Cを下回ると土の中でじっとして冬眠する。10月から4月までのおおよそ半年間だそうだ。

◎展覧会が急に決まった。ひと月ぐらい前に、「岡村さん 5月 やってよ」「おお 了解」なんて気軽に應對していた。喫茶店のような場所で、わかりやすい絵を10点も飾ればいいかなぐらいに思っていた。4日ほど前に、会場を見に来てくれませんかと言われ、歯の検診の後、昼飯を食って車を走らせた。能勢方面は土地勘がない、黒川とは何県かなと調べると兵庫県川西市であるが、大阪府豊能郡能勢町と大阪府豊能郡豊能町と三つの町が入り組んでわかりづらい。

◎展覧会を企画してくれた方は、10歳ほど年下の女性、高校同窓会館で北海道の分水嶺を縦走したという方の講演を聞きに行った時に会った。この北海道の話、前にもここに書いたと思うが、30歳過ぎの登山家の青年が、2月ごろに北海道の北の端：稚内から東西の分水嶺を縦走して襟裳岬に降りたという話で、NHKでも放送され、有名登山家の仲間入りを果たした人の講演であった。大変な行程だと思うがこの時代なので麓の親衛隊とは密に連絡を取り、道具が潰れたと言えは途中で持って上がってくれる、デポした食料が紛失してしまったと言えは途中で持って上がってくれる、ということもあったようで、一昔前の冒険とは様変わりしている。もっとも先日ネパールで遭難した中島健郎なども、麓の仲間と密に連絡はあったようだが、雪崩か滑落かは知らないけれど、ここばかりは助けに行きようがないね。

◎話はそれだが、車で黒川の住所をナビに読ませ走った。毎月、箕面止々呂美方面に行くので、まずは箕面の山を越え、「4号線をまっすぐ走ってみようか」と進んだ。細い山道をくねくね、ナビは右へ左へ誘導してくれ、見知った車が止まっている横に駐車した。“黒川ファーム”は向かいで、その反対側に“Café&Gallery 黒川”があった。同じ黒川は紛らわしいと思ったが、街中がみな親戚なのかもしれない。

◎この黒川、月の初めの10日間は営業日で、今は20歳の女性の絵画展をやっていた。オーナーと友人の女性二人が出迎えてくれた。飾られている絵はもうひとつ感動しなかった。「お いいね」と言いながらも伝わってくるものがない。ダウン症の彼女らしいが、描きたいものを素直に描いていない、師匠がいるようだけどその方の意見やら筆やらが入りすぎ、彼女の彼女らしさが感じられない。

◎「岡村さん 大きい絵も出して たくさん飾って」小さい絵をちょっと飾ればそれでよし、こんな遠いところに来てくれるオレの友はいない、なんて気軽に思っていたが、どうもいつの展覧会ぐらいに大きな絵も含め、たくさんの絵を並べないといけないようで、「こらあ 気を入れなくっちゃ」と発奮中である。絵はもうたくさんある、任してと安請け合いできるぐらいに作品はたくさんある、どれを並べても様になる雰囲気のある壁である。

◎広い敷地に古民家造りの母屋があり、その前に木造平屋の小屋風建物を全面改装して、片流れの屋根、白い壁、絵が映えそう、天井高も3メートルから5メートルと感じがいい。外壁は黒の壁一面で、小さい板に炭で黒川と墨書されている。お〜い、みんな、見に来たってや〜、である。

◎今、高安山を登っております。桜の花があっちゃこっちゃんに満開のさまで咲いております。オレが一番に感動するのは里山の斜面の中に、その山肌に、ぽつりぽつりと桜の花が咲いている様子です。濃い緑の中に白くピンクにホワリと咲くその様子にすごく感動するのです。桜の木の下でとか、桜並木を散歩してとか、そういうステーション、桜見物の定番風景、「あ 咲いてるね きれいなもんだ」とはいうけれど、おれはあまり感動がない。花見と言えば桜の花が咲く寒い時期に、莫産を引きお神酒と弁当を持参して、何時間もワイワイ酔っぱらっていた思い出がある。桜を引き合いに出して野外でちよい飲み、それが日本人のスタイルだったのかね。そのてん、山を見上げ咲く桜を見ると、「おお素晴らしい」となるわけだ。詩を感じるように山肌を見上げ白色の微妙な光線を感じてしまう。

◎かつて、高安に住んでいた頃、外環状線の道路を車で走らせながら、山の中の桜の花を見て、「なんであんなところに 桜の木があるのかな」と思っていた。とあるとき、「あれはね 里の人らが 植えたもの 下から桜見物をしてもらいたいために」と聞き納得した。それ以来八尾方面を走る時には、山肌をそっと見て、「今年も咲いてるね」と楽しんでいた。オレが毎月のように出かける止々呂美あたりの山肌も八尾に負けずに美しい。今度展覧会をする黒川あたりもなかなかのものらしい。

◎高安には 30 歳前後に 5 年ほど住んでいた。当時は近鉄八尾駅付近が中心の繁華街で、JR 八尾・山本・高安あたりはひなびた街だった。義理のジジババちゃんたちがその晩年、山の麓の施設にいたので、度々そこに見舞いに行ったついでに、「ちよい てっぺんまで」と何度か登った。地図を見てみると無数の登り口がある、さすが都会近郊の里山である。暗峠（くらがり）、十三峠、「そういや 昔登ったねエ」懐かしい名前が出てくる。今日の高安山登山道は初めてである。ケーブル下の駅から線路沿いにチョイ下がり、細い踏切を渡って狭い道路を上に行くと急に山道になり、エンヤコラ登った。

◎伊勢物語の中に出てくる「高安の女」「信貴山縁起」「高安古墳群」「近鉄電車の基地」・・・

◎てっぺんで昼前からコンロに火を入れ、肉を焼きだした。「これが美味しい肉」「これが次にうまい肉」肉の味はわからないオレ、ついでに、酒の味もわからない。わからない割にはいろいろおいしくいただいている。お神酒を鱈腹いただき、3 時台のケーブルに乗った。JR 環状線に乗りうとうとして、「にしくじょう」という駅名にはっとした。「え 九条 まさか 京都・・・」しばらく頭が回転せずボケ状態であった。

◎エドヒガンという桜の名前、聞いたことがあるなど調べると、有名な巨木はこの品種だそう。1000 年以上長生きし、背も高く 20 メーター超えもあり、色も白からピンク赤までであるそう。高安山の翌日、もう一度黒川で打ち合わせをしようと思っかけた。難波・ひろみ両さんが付き合ってくれた。カフェではお客さんが居たので、「ちょっと先に 桜の杜 を見てきます」と出かけた。天気予報通り、来るまでの道中は晴れていたが、だんだん曇りだしてきた。白い桜の花びらは、背景の空が青いとか、まわりの樹々が深い緑色であるとか、こういう場合には花が生き生きするけれど、白い空に白い花は残念ながら迫力が無くなる。それと背の高い桜は遠くから見るに限る、近くで見ると、花を見るために見上げなければならないね。それにしても山肌に咲く白い桜は、「そらあ きれい」と感動する。

◎黒川の桜はエドヒガンだそう。背が高く、樹々が大きく成長し、群生している。止々呂美の山肌のモノはなんの木か知らないが、これも見事なものである。

三浦祐之著<口語訳：古事記>

◎いよいよ降臨が始まる。先生、ずけずけとおっしゃる、「頼りない ニニギ・・・」国家の歴史、天皇家の話なのに、はじめて地上に降りたつ神が、いささか頼りない景色というのは面白い。威風堂々と描かない所がいいのかもね。

◎さてここに、仰せを受けたアマツヒコヒコホノニニギは、高天が原の御座所（みましどころ）から立ち上がると、天にかかる八重のたなびき雲を押し分けて、力強く道を踏み分けしての、天の浮橋に到りつき、しっかりとお立ちになると、そこから一息に、筑紫に日向（ひむか）の高千穂に高々と聳える嶺に天降（あも）りなされた。

◎アマテラスを招きだした時の、あの八尺の勾玉（やさかのまがたま）と鏡、スサノヲが奉った草薙の剣。それに、常世のオモヒカネとタチカラヲとアメノイハトワケとを副えて与えなされて、  
「この鏡は ひとえに我が御魂として わが前に額づくがごとくに祈り祀りたまえ」  
「オモヒカネは この鏡を祀ることを司り 祭りを執り行いなさい」と仰せになった。

◎草薙の剣：スサノヲが退治したヤマタノオロチの尾から出てきた剣。

◎草薙の剣・勾玉・鏡、天皇家の三種の神器。

◎サルタビコとアメノウズメは、五十鈴の宮（のちの伊勢神宮の内宮）を祝い祀っている。

◎アメノコヤネは中臣の連の祖神。藤原氏の本家。

◎フトダマは忌部の首（おびと）の祖神。（のちに滅んでいく）

◎アメノウズメは猿女の君らの祖先。巫女の一族。

◎イシコリドメは鏡造りの連の祖先。

◎タマノオヤは玉祖の連の祖神。

◎さて、下の国に降りたホノニニギは、

「ここは韓（から：朝鮮半島）の国に向き合い 笠沙の岬にもつながり通っており 朝日が海からまっすぐに射し昇る国 夕日がいつまでも輝き渡る国である この地は ほかに比べることのできないすばらしい処である」

とこう言うて、地の底の磐根に届くまでに深々と宮の柱を掘り立て、高天が原にも届くほどに高々と氷木を聳やかした宮を作って、そこに住まわれることになった。

◎ニニギは、アメノウズメに、

「われが降りるに先払いに立ち よく仕えたサルタビコは はじめに声をかけ身元を明らかにしたそなたが元の国にお送り申せ また その神のみ名を そなたは受け継いで お仕え申しあげるのだ」と言われた。それで、ウズメの末の猿女（さるめ）の君の族（うから）たちは、そのサルタビコの男の神の名をいただき、女どもを猿女の君と呼ぶことになった、そのいわれはここに始まる。

◎アメノウズメは伊勢ノ海に出て、伊勢ノ海にいる鰭の広く大きい魚も、鰭の狭く小さい魚も、ことごとくひとところに集めて、

「お前たちは 天つ神の御子にお仕えいたすか」と問うた時、もろもろの魚はみな、「お仕えいたします」というた。ナマコだけは無言だったので、ウズメはナマコの口を横に裂いた。ナマコの口は今も横に裂けている。

- ◎朝の7時、JR山崎駅を歩き始めた。「こっちから」「いやいや ミツマタ が見たい」と我がまを言いお二人をこちらの方に引き寄せた。これで二度目だが、「ええと こっちな」と言いながら路地のような細い道を左右と進み、背をかがまないと渡れない水路の横の小さいトンネルを進んだ。上は東海道線が走っている、レールが何本並んでいるのか長い距離のトンネルを進んで行く。
- ◎「お まだあるね 白くなっている」「最盛期は もっと大きな ボリューム クリーム色だったよ」サントリーが管理しているとか“ミツマタ街道”時期遅れとはいえクリームが勝った白いぼんぼりを木に着けた、オレの背丈の倍ぐらいのミツマタが並ぶ。もう遅いとはいえそれなりに楽しめた。ミツマタが過ぎたあたりから、酒解神社の三つの祠、その次に石畳みを進んで拝殿と舞台、もひとつ進んで天王山へと進む。
- ◎このあたりの横に、サントリーのウイスキー工場がある。サントリーのサイトに、“天然水の森 天王山”と書いてある。多分この工場ができたころ、昭和の初期かな、調べると山崎蒸留所はおよそ100年前らしい。100年前のこのあたりはまったくの田舎だと思われる。まったく田舎の山の麓にJRの駅があり、その横にこの蒸留所が造られた。そのころはピカピカの水が流れていたはず、さぞかし美しかったと想像する。「え なにが言いたい」そう、オレはこのあたり、京都西山のこのあたり一円の山を歩く度に、「水が 汚い なんだか黄色く濁っている なんだかおかしい」と常々思っている。およそ都市近郊の山から流れる水は美しいとは言えないが、京都西山のこのあたりの谷筋は、いつも黄色く濁った水が流れている、「あの水を汲んで 飲みたい」とは思わない。「そらあ おまえの 思い込みじゃねえか」といわれりゃ、そうかもしれないが・・・。
- ◎青紫色の“ツツジ”か“サツキ”の花が最所から最後まで目を楽しませてくれた。山の所々に今を盛りに咲いていた。山桜のポツリぽつりとあった、桜吹雪が地面の上で敷きつめられたように並んでいる。「きれいやがなこの花びら」と喜びの女タケビ声をあげながら、「先日 ひとりで山に行って、ずっと縦走しようと歩いていると 友達と会って 話が弾んで そのまま降りて ビールを飲む羽目になってしまった」と笑っておられる。少し進むと今度は、歩いている地面に5センチぐらいの白い花びらがいくつも見られたが、上を見ると花はない。「あれは タムシバ」「そういやあ 去年も教えてもらった」と見渡すと遠い山肌に、大きな樹がいくつもあり白い花びらを着けている。
- ◎前から来た紳士が、「今日は すこし 涼しいですね」と、「ほんま ちょっと 涼しいですね」と返したが、こちらは斜面を登っているの暑さで暑いぐらいである。「すぐ先 扉の中 カタクリがすごいですよ」「えええ うわあ 楽しみ ありがとう」と別れたが、我々同道のNさんとは、山友の知り合いで、「やああ」と挨拶をしていた。
- ◎今日は天王山からポンポン山を超え、上の口からバスというコース、コースタイムは8時間となっている。「8時間なら 休憩をたくさんとって ゆっくり歩きましょう」と何度も休憩し、二度もコーヒーを沸かして飲んだ、登りと下りの2回、ちょっと平らなところでポンベを出し、ヤカンに水を入れ立ったままでコーヒーを飲んだ。12時にポンポン山につき、昼飯タイムは30分も取った。「ゆっくり登ると 疲れないね」と言いつつ縦走が終わってバスに乗ったのは3時、8時間で歩いたようである、急がば廻れだね。
- ◎「え あ 春蘭」丁寧に網を被せられた中になんとか植物が居る。「これねえ すごう めずらしい もってかえりゃ 高値で売れる・・・」まだ花が咲いていないが蕾は見える、網の中ではなにがなにやら詳しく見えない。帰って調べると、珍しい花らしいが、そっと咲く野の花のようである。
- ◎「おお ここだ おお 咲いてる」我々はフェンスの扉を開けて中に入った。広い地面いっぱいカタクリが咲いている、あたり一面、という表現がぴったりの咲き方、カタクリだらけである、これは見事である。
- ◎ポンポン山のとっぺんで三人並んで弁当を広げた。「少し 寒いね」防寒ジャンパーを出して着込んだ。先ほどの方はこれを言っていたのだね、風が冷たい、じっとしていると寒い。
- ◎本山寺から、神峰山寺の舗装された道を歩きながら、「この道は やだね 今度から 高槻じゃなく 山崎 長岡京 向日 あたりから歩くといいね 舗道はやだね」

土佐守紀貫之子死読和歌語 24-43<とさのかみ きのつらゆき こ しにて わかをよむ こと>

◎今は昔、紀貫之という歌人がおった。土佐の守になって任国に下ったが、やがて任期が終わった。貫之には、七、八歳ほどの男の子がありかわいらしい子であったので、掌中の玉といつくしんでいたが、ふとした病に数日患った末、はかなく死んでしまった。貫之はこの上なく悲嘆に暮れ、泣きまどうて病気になるほど恋い慕ったが、やがて数か月がたち、国司の任も終わったこととて、こう悲しんでばかりもおられず、上京することにした。だがいざ、旅立ちとなって、あの子がここでああして遊んだ、こうして遊んだなど思い出され、いいようもなく悲しいので、柱のこう書きつけた。上京後も、その悲しみの心は失せなかった。

みやこへと 思ふ心のわびしきは かへらぬ人の あればなりけり

◎紀貫之の土佐日記：ネットで検索すると、「ネカマ」という言葉が出てくる。最近の SNS で男が女に成りすまして、とやかく言う男の事らしい。

◎男もすなる日記というものを、おんなもしてみんとすなり。

男の人がするもの、女の私も してみるね・・・ネカマ口調。

◎貫之の言葉：やまとうたは 人の心を種として よろずの言の葉とぞなれりける

当時男は漢文で書いていた、女はひらがなで書いていた。

ひらがなは表音文字なので、漢字で表記しにくい日本古来の大和言葉を書くのに向いていた。

◎竹取物語、源氏物語、伊勢物語は漢字とひらがなの併用。

◎土佐日記：日本で初めての日記風文学作品でもある。100年足らずのちに、女流文学の「紫式部日記」や「蜻蛉日記」はひらがなで書かれている。土佐から平安京までの55日間を、女のふりをして書いた日記。

◎土佐から京都まで旅程の大半は船旅だった。当時陸上交通が発達してなく船は重要な交通手段だったが、天候に左右され、悪天候で足止めされた。

◎四国の太平洋側の海岸線沿いを室戸岬に向かって進むも、悪天候で停泊した折、月を見て、唐に渡ったまま帰国できずに亡くなった阿倍仲麻呂のことを思い出す。

仲麻呂の歌 天の原 ふりさけ見れば 春日なる 三笠の月に 出でし月かも

◎下ネタ

鮎の塩漬けをみんなで頭からしゃぶっている。もしかして鮎は口を交じらわせ、キスして、変な気持ちになってないかしら。

女性の水浴びシーン。

女性は船中派手な服は着ません。なぜなら海の神様の崇りをおそれるから。目隠しにもならない股の葦を身につけて、ほや（男のマラの事）に合わせるアワビ（女のホトの事）を、思いもかけず海神様たちにみせている。

◎二十七日。風吹き波荒ければ、舟出さず。これかれ（あの人この人）、かしこく（おおいに）嘆く。男たちの心なぐさめに、漢詩に、「日を望めば都遠し」などいうなる言のさまを聞きて、ある女の詠める歌、

日をだにも 雨雲近く 見るものを 都へとおもふ 道のはるけさ

またある人の詠める、

吹く風の 絶えぬ限り したちくれば 波路はいとど はるけかりけり

- ◎9:00 歩き始めた。一年前、薊岳山行の話を聞き行きたいと思っていた、その間に2度明神平に行ったが、「おここから登るんだな」という鉄の階段梯子は見つけていた。今日はその階段を上り、時々手をつけて岩や土や根を掴みながら斜面を登っていった。
- ◎7時に三国ヶ丘駅集合、4時半に起き、弁当、水筒、朝飯、6時前の電車に乗った。動物園駅で降り、南海電車の標識に沿って歩いた。向こうに高架がある、「え 新今宮駅はJRと南海がくっついているのか」とホームに入ると次の電車は三国ヶ丘には行かない。改札に戻って駅員に聞くと、「堺東で乗り換えて」ということで、目的の三国ヶ丘駅に着いた。きよろきよろしていると名前を呼ばれ川崎車に乗せてもらった。
- ◎「コバイケソウが顔を出しだした」そう言われよく見る草だと調べたら、「およく見る 白い尖がり花」急坂をエンヤコラ、90分ぐらいで1334地点：乗越にやって来た。コースタイムの120分登りと思ったが、上の方に空が見えてきた、もう少しで着けるぞとふんばった。
- ◎10:40 まずは尾根道に到着。すこし手前から杉の植林地帯が終わり広葉落葉樹林帯に入ったが、まだ若葉はない、雪もない、標識もない、人もいない、おだやかなポコリン尾根、「うわわ いいところ ええとこじゃあ」と叫びたくなる。
- ◎ルンルン尾根道を行くと石ころが散乱する、「これが 薊岳です」「ええ これが もう着いた」少し休憩して、「ええと こっちの方角 どこが道」右の方に行く道はあるがそれは大又の方に行く道で、我々が進む道がない。「ここを降りたいが 短いザイルしかないので こっち」「えええ」「ちょっと 気をつけて」「えええ」ここを落ちたら助かるまい、というところをそろり一歩、掴むところがない、次の足を一歩、ズルリが来ませんよう祈りつつ冷や汗の5分が過ぎた。崖の上のトラバース、足で立てるところまで行き振り返ると、「帰りは あそこを登れば 簡単 今も あそこを下ったら よかったんだ」高所恐怖症のオレである。
- ◎12:00 恐怖のあとはおよそ100Mほど下り登り返すと、木の実矢塚に着いた。薊岳にはかまぼこ板のような標識が木に括りつけてあり、ここは板に書いた標識がブナの幹に括りつけてある。ほとんど人の入ってこない山のようなようだ。ここで弁当を広げた。連れてきてくれたKさんはビールを美味そうに飲んでいる。雲ひとつない青空だが、春霞、ぼ~とした青空ながら陽が照っているのでシャツ2枚で快適である。
- ◎木の実矢塚は丸いお椀を伏せたような、ヘルメットのような、大きなぽっこり、ブナがいっぱい、若いもの、中年のもの、ここのブナたちには親分が居ない。もうすぐ若葉が出だしてまわりの景色は見えなくなる、いい時に来たものである。ブナのどんぐりが“木の実”なのか、なぜ“矢塚”まで付いているのか、不思議な名前。
- ◎1:00 薊岳に帰ってきた。「なんだ 此处を 降りたら よかったんだ」大嶺の山脈が遠くに見える。「一本取りましょう」「古めかしい 言い方やねえ」「ほほ 昔から こう言ってます」尾根道を上がったり下がったり、前山までやって来た。あんちゃんが一人ハンモックで寝ていた。下の方の山肌に桜がぽつりぽつり咲いている、「こらあ きれい いいなあ」小鳥がピーチク鳴いているが姿が見えない。獣も鳥も無しの日です。
- ◎連れてきてくれたKさん、「桜の花が好きで 全国 追っかけをやった」「・・・」なんだつまらんといいながらよく聞くと、桜の説明から始まった。ヒマラヤ原産の桜が伝わり、桜の花が好きな日本人は古来より品種改良を重ね、桜といえばソメイヨシノという現代になった。Kさんは、「おれは 野生種の桜の花の 追っかけだ エドヒガンだとか ヤマ桜だとか そんなが好きや」とおっしゃる。そう聞けば、「そらあ すごい」というわけである。野生種は、先日知った、エドヒガン桜、ヤマ桜、オオヤマ桜、ミヤマ桜・・・である。10ぐらいの野生種をもとに、名前がついた栽培種は800種ぐらいあるらしい。「石川県 善正寺の キクザキ桜 これがすごい」ネットで見ると、「おお すごい」である。
- ◎前山からは草原の上に白い岩がゴロゴロ、天王寺高校と天理大学の小屋が見える、いつもの見慣れた明神平が見える。下って湧水を飲み、ペットボトルにも補充した。今日は2リッターほど飲んだかな、いささか疲れが出てきたが、下の林道まではまだまだである。4回の渡渉を終え、車のところに帰ったのが4時半であった。Pを5時ころ出発して8:18発：東岸和田駅から大阪駅、9時半に家に帰り着いた。

◎今回の展覧会は、「岡村隆久画伯登場」という名前、「ほほほ こらあ 面白い いい題名だ うまいこと 名付けてくれた」とニヤリ。二十歳代から“画伯”というあだ名でよくみなさんから呼ばれていた。「ま 理屈バツカ 言っていた せいかもね」であります。

◎この展覧会を企画してくれたのは、小林美香さんです。高校の同窓で十余歳下の方です。一年前に、「北海道を北から南に 分水嶺を 踏破した 野村君」という講演を聞きに行った時に彼女と初めて知り合いました。登山家の話はNHKで放送され有名だったらしいが知らなかった。

◎78歳のジジイになって、「オレは 絵描き と 登山 それだけしか しないぞ」常々言っています。これは半分嘘で、雑用も次から次にやって来て、内心喜びながらゆっくりこなしています。登山は40歳前ぐらいから始めいまだに登っています。最近は近畿の山ばかりになったが、今期の冬山、雪山を10回足らず楽しませてもらった。「山は なにが面白いのだ？」と問われたら、「ただ 斜面を歩くだけ 登山とは それだけよ」もちろん、「景色はいい 空気は美味しい」とおまけがついてくる。

◎CAFÉ&GALLERY 黒川の小早和子さんとは、小林宅のBBQ会で紹介され、「黒川という場所で 近々 絵が飾れるカフェをする」と聞きましたが、なにがなにやら??・・・という状態で話していました。4月になって、小林さんから「5月 黒川で 展覧会 しましょ」と言われ、「小さい絵を 10点ほど 飾ればいいのか」ぐらいに考え、気軽に安請け合いをしました。「いやいや せっかくだから 大きいもの 迫力のある作品を いい展覧会を」「・・・」「あの絵も この絵も 出品すれば」という声が小早、小林両さんから出てくる。「じゃあ いい展覧会に するぞ」「こりゃあ 気が抜けんぞ いつものように飾ろう 楽しもう」そうこうしながら、一か月足らず、並べる絵の用意をしてきました。

◎「黒川って どこかな」兵庫県川西市黒川と大阪府豊能郡とは複雑に入りこんでいる。カフェの場所は能勢電鉄妙見駅から2キロほど、廃線になった妙見ケーブルのそば、「なんだ 先日登った 妙見山の麓 じゃないか」と合点がいった。いや合点が入ってない、「何故なら オレは 男のくせに 方向音痴」いまだにあのあたりの地図が朦朧としている。

◎4月の初旬、車で山を越えやって来た。山肌に桜の花が咲いている、黒い緑の中に、ややピンク、やや青く、やや紫、「えらくきれいだね」オレは川沿いや道沿いの桜並木より、山肌にポツリポツリの桜が好きだねえ。黒川の桜は“エドヒガン桜”だそうで、背の高い木に花が咲き誇っていた。

◎2020年、コロナ禍が始まって、「え 展覧会も してはいけないのか 中止にしなければいけないのか」展覧会一週間前に中止を決めた。それから三年が経ち展覧会を再開してみると、人が来ない、絵を見に来てくれない、なぜ人が来ないのだろうと不思議に思ったが、オレの知人友人たちは老齢のせいと身体的に動けない、精神的にもアートだ絵画だという気持ちが失せたようである。そんな時に、「黒川で 絵を 飾りましょう」というお誘いは嬉しかった。